

〔研究ノート〕

阪南大学型「高大連携」の現在 (3)

——阪南大学高等学校「サキタン」実施状況——

神 尾 登 喜 子

高大連携プロジェクトチーム

- I はじめに
- II 高校生の言語化力へ向けての検討
- III グループワークと言語化
- IV 添削方法と自己肯定感の醸成
- V まとめにかえて

I はじめに

2022年度3月より阪南大学高等学校(以下「阪南大高」と記す)との高大連携事業として「単位先取り(略称:サキタン)プログラム」が開始された。この詳細については、既に2024年度に公刊された学内紀要『阪南論集』第60巻第1号及び第2号において「研究ノート(1)(2)」として公刊している。

ここで、阪南大高からのオーダーについて項目だけ上記第60巻第1号より引用しておくこととする¹⁾。

- 1) 生徒向けの90分間の授業設計
- 2) 言語化力の向上
- 3) 授業内容の再設計
- 4) 本学キャンパスでの対面実施
- 5) 自己肯定感と成長実感

本項目は、阪南大高と本学高大連携プロジェクトチーム(以下「PJ」と記す)との複数回の検討の結果、他大学が実施するいわゆる「吊るし型」の授業提供ではなく、阪南大高生向けにカスタマイズすることが合意事項となっている。その合意を受けて、上記5項目が阪南大高との「サキタン」実施にあたっての到達地点となった。

ここで強調しておけば、本プログラムによって阪南大高から本学への志願者と入学者を増やすことよりも、大学への円滑な移行を実現することである。まとめておけば以下の3点となる。

- 1) 僅かな時間であっても大学という教育機関に直接身を置き単位を取得すること。
- 2) それによって高校生自らが、近未来の大学での学修者としてのイメージ形成をできること。
- 3) 「学びの還流」を意識し、シームレスな学びへ向かっての基盤を形成させること。

阪南大高生に高校段階においてこの経験をさせることが目的である。その結果、志願及び入学に繋がるに越したことはないが。

II 高校生の言語化力へ向けての検討

本項目を記すにあたり、2022年度及び2023年度実施(実施期間:2023年03月13日(月)～17日(金)・2024年03月13日(水)～19日(火)・教室:123教室)の授業内容と課題を整理しておく。

科目名:国際文化入門(現行:歴史と文化入門)

当初、阪南大高への「サキタン」プログラムへの提供科目は、国際コミュニケーション学部(現国際学部国際コミュニケーション学科)の1年次必修科目(現在は選択科目に変更)であった。そのため、学術性と1年次後期以降の学び

へのガイドとなる内容としている。「サキタン」
用科目として別途の対応はしているが、その具

体的な内容は以下に掲げた内容となる。

【授業内容及び課題内容】

日程	時限	授業内容	課題内容
第1日	1	第1回 本授業を通して学ぶ事柄と高等学校諸科目との連動性－大学での学びのために必要な高等学校の授業－	課題1：高校3年間で「実現したいことリスト5項目（現在）」と、大学4年間で「実現したいことリスト5項目（未来）」を作成せよ。 課題2：実現するために具体的にどのような行動をおこすかを箇条書きせよ。
	2	第2回 高等学校での2年間を振り返ってみよう－今の自分自身から「未来を考えてみる」－	課題：阪南大学教務課高大連携PJ作成オリジナルワークシート◎
	3	第3回 アジア諸国の国際化とその経緯－近代化するアジア諸国：日本／タイ王国の同時代性－	課題：異文化を本質的に知るために必要な事柄とはどのようなことであると考えるか。君たちの考えを5つあげよ。

日程	時限	授業内容	課題内容
第2日	1	第4回 外国文化の導入と変貌する日本の風景－新たな技術とマテリアル－	課題：外国文化や技術あるいは素材を受け入れることにおいて重要な事柄とは何か。君たちの考えを5つあげよ。
	2	第5回 I 外国人は日本を本当に理解できたか(1)－Mathew Perryの遠征－ II 外国人は日本を本当に理解できたか(2)－Edward Morseの採集－	課題：異文化理解をする上で、食文化は重要となる。さてここで問題である。魚介類、特にイカやタコを日常食としない外国人にこの食材を使ったおススメ日本食を100字(95字～100字)でそれぞれ紹介する文章を作成せよ。
	3	第6回 外国語で自国の文化を紹介することの意義とは何か－文化の国際化への方法と文化の翻訳－	課題：諸君が外国人に日本文化を紹介するとすれば、何を、どのように紹介するか？100字(95字～100字)で完結に記せ。 Mission：keywords3つを抽出しそれを手掛かりに100字で作成せよ！

日程	時限	授業内容	課題内容
第3日	1	第7回 全てを翻訳できない文化概念と翻訳の限界－言葉の翻訳と文化の翻訳－	課題：諸君にとって英語をはじめとして将来を考えた時に、外国語を学ぶ意義とはコミュニケーションの他に何があるといえるか？資料を参考にしながら5つ抽出せよ。
	2	第8回 ヨーロッパ王制の落日と陸続きの利点－ヨーロッパの王と日本の天皇－	課題：第8回の授業を通して得た知識や、高等学校での世界史や地理の授業をふまえて、諸君がイメージするヨーロッパ大陸やヨーロッパ諸国についての理解を150字(145字～150字)でレポート作成せよ。 Mission：キリスト教・市民の出現にもう一つkeywordを抽出しそれを手掛かりに150字で作成せよ！
	3	第9回 漆器から西洋食器への転換－イギリス・ヴィクトリア女王時代と明治の欧化－	課題：異文化を受け入れることにおいて「模倣(まねすること)」は不可避のことであるが、その重要性について150字(145字～150字)でレポート作成せよ。 Mission：keywords3つのうち「模倣」「創造」に加えもう一つを抽出しそれを手掛かりに150字で作成せよ！

Mar. 2025

阪南大学型「高大連携」の現在 (3)

日程	時限	授業内容	課題内容
第4日	1	第10回 博覧会の世紀(1) - 19世紀～20世紀の文化の国際化 -	課題：1970年の千里での万博開催以来55年。大阪を会場とした2025年の万博の重要性について <u>150字(145字～150字)</u> でレポート作成せよ。 Mission：keywords 3つを抽出しそれを手掛かりに150字で作成せよ！
	2	第11回 博覧会の世紀(2) - 歪んだ理解と外国文化への関心 -	課題：諸君が、外国人に絶対に知ってほしい、あるいは教えたい「推し」の日本文化を一つ取り上げ、その理由を <u>200(195字～200字)</u> でレポート作成せよ。 Mission：keywords 3つを抽出しそれを手掛かりに200字で作成せよ！
	3	第12回 宗教の衝突と異文化理解の原点 - 日本の宗教事情とその特殊性 -	課題：ローマ教皇レオ10世をはじめとする宗教者による贖罪符(免罪符)販売は、良い行為であるのか？悪い行為であるのか？諸君の考えを <u>200(195字～200字)</u> でレポート作成しなさい。どちらの立場をとったとしても、君たちの考えを整理して言語化することが重要となる課題です。 Mission：keywords 3つを抽出しそれを手掛かりに200字で作成せよ！

日程	時限	授業内容	課題内容
第5日	1	第13回 レポート作成の方法(1) - 振り返りの方法とkeywords抽出 -	宿題：自分を作っているkeywordsとは何か？ i) 自分を知る…現在の自分を構成するPoint10個の抽出 ii) 自分を伝える…Pointそれぞれをまとめる iii) 自分の言語化…10のセンテンスを使って各種の課題を文章化
	2	第14回 レポート作成の方法(2) - 抽出keywordsを使った言語化 -	課題： i) 本学専願入試「学修計画書」の作成 ii) 本プログラムへの振り返りレポート200字の作成
	3	第15回 レポート作成の方法(3) - 言語化されたセンテンスを使ったまとめ方実践 -	

筆者の当初の計画では、第1回目の授業課題から、300字のレポートを課していた。それに対して、PJメンバーより以下の意見が提示された。

◎高校2年終了段階で300字のレポートが書けるか。

◎300字を200字にしてもレポートとしてまとめるには困難ではないか。

◎本プログラムの目的の一つは高校段階で大学入学後もやっていける実感を与えることである。それが実現できる課題か。

◎この課題では「自己肯定感」も「成長実感」も持てない。このプログラムのコンセプトはこの2つを提供することが基本である。

◎そもそも論として書ける人の課題提示だ。

極めつけは、「書けない高校生に寄り添う気持ち」が欠片もない」とまで指摘された。当時の

メモをもとにここに文字化しているが、このPJメンバーからのアドバイスが無かったならば、おそらく、本プログラムは初年度の2022年度から躓いていたと断言できる。

そこから、課題提示の方向性を一転させ、高校生段階で出来ることは何かの検討を行うこととした。その結果が、前掲の一覧表にあるように、1項目60字を目安としての項目抽出から始めることとなった。

ある意味では、「コロンブスの卵」だった。あるいはトンネルを通り抜けるために車高を落とすタイヤの空気抜きの発想によって切り抜けたのである。それこそが、高大連携プログラムにおけるカスタマイズのステップ1となった。

原稿用紙を基準として200字・300字・400字の字数によってまとめることを日常としていない高校生。彼らに向けて、1年次生を対象とす

る科目とはいえ、大学で実施している授業を提供し、それをふまえていきなり 300 字のレポート作成はハードルが高すぎた。

しかしながら、PJ メンバーが筆者の授業設計に対して、的確な指摘をしてくれなかったとしたならば、2022 年度（受講生 38 名）・2023 年度（受講生 112 名）の阪南大高生は、初日 1 限第 1 回目の授業から躓いていたことは想像に難くない。筆者の授業設計を実施した場合には、阪南大高からのオーダーの一つ「5）自己肯定感と成長実感」も、最初から実現不可能であったのだと言わざるを得ない。

ともすれば、授業は教員の所有物という感覚が生まれる。それは筆者自身も例外ではない。もちろん、授業科目を担当するにあたっては、その担保として研究論文を有していることが大前提であるため、そのような感覚が生じても不思議ではないし、妥当なところではある。しかも始末の悪いことに、筆者は、上手くはないが書けないという状況に陥った経験がない。

けれども、前掲の「書けない高校生に寄り添う気持ちが欠片もない」課題から、寄り添う課題とは何かを思案した結果、先ずは、最大 60 字程度の 1 センテンスでの項目抽出から始めることにしたというのが経緯である。

日程	1 限	2 限	3 限
第 1 日	項目抽出	項目抽出	項目抽出
第 2 日	項目抽出	100 字	100 字
第 3 日	項目抽出	150 字	150 字
第 4 日	150 字	200 字	200 字

上表が、前掲の一覧表から抜き出した初日から 4 日間の課題の出題方法である。

Ⅲ グループワークと言語化

大学の授業については、「大学設置基準」²⁾に示される通りであるが、「サキタン」プログラムを実施するにあたり、概略以下の 90 分間の授業設計を行った。

授 業	45 分
+	
課題作成	15 分
+	
グループワーク	15 分
+	
プレゼンテーション	15 分

当初、阪南大高への提案と受講生募集においては、45 分間の講義の後に、10 分間の休憩を挿入する旨を告知していた。が、授業を実施してみると、設計通りにはなかなかうまくはいかず、受講生には適宜休憩をとる指示を出すこととなった。ところが、生徒の授業出席への意識が高かったようで、この 10 分間の休憩は、さほど意味はなかった。むしろ、受講生は、講義から課題への時間移行を各自がカスタマイズすることで時間の有効な使い方をしていたというのが、一番適切な教室の風景だと言えるだろう。

講義内容は、高校 2 年生に理解し易い表現と説明を詳細に行うことと併せて、通常の 90 分授業で使うパワーポイントデータを「メイン資料」と「補助資料」とに分離分割し、「メイン資料」のボリュームを削減することとした。45 分の授業内で、適宜「補助資料」の参照を行っている。高校での授業では教科書を使用することが通常である。そのため、受講生にとっては違和感を覚えたかもしれないと推測するところではあるが、それを最小限とするための方法として事前に次日の授業資料を俯瞰できるよう予めの配布を行った。その結果、予習をしたか否かの確認はしていないためこれ以上の言及はできない³⁾。

さて、授業では、予め受講生を 4 名 1 組で固定のグループ分けを行った。前半の講義と課題作成は指定座席、後半はグループワークのために事前に配置した座席での実施とした。

最初は、受講生も「初めまして状態」のため、戸惑いも見受けられたがグループワークを重ねていくことで、互いに伝える方法を試行錯誤しながら自分流を作り上げていた。特に、言語化した自分自身の考えをグループのメンバーに伝

Mar. 2025

阪南大学型「高大連携」の現在 (3)

えるというワーキングを通して、発信力と傾聴力を体得していくのは極めて速かった。それと共に、他者の意見を積極的に受け入れるためのメモ力や、各グループでテーブルに乗った内容をまとめるスキルは、受講生が自発的に培っていったと言ってよい。

少なくとも、グループ内で出てきた意見を否定することなく、そこから一つのまとまりを作り上げようとする受講生の考え方は、ブレインストーミングそのものであったと言える。否定されない環境があるからこそ、自分の意見について自由に発信でき、出てきた意見を全て集約してまとめるという方向性を見出そうとしていたかと思慮する。その成長は、PJメンバーと各部署からの援軍が机間巡視しながら適切なアドバイスを実施した結果でもある⁴⁾。

最後の課題であるプレゼンテーションでは、パワーポイントを使用せずに、言葉だけのパフォーマンスとした。ツールを使わずに、自分たちの言葉だけで的確に伝えるために、どのような表現で、どのようにまとめるかを考えることも、大学進学後には必須となるスキルであるため、その旨を伝えた上で受講生には課題に取り組ませている。さらに、PJメンバー、援軍、筆者は、机間巡視の中でプレゼンテーションに向けてのまとめ方に試行錯誤しているグループに対しては、以下を行っている。

◎何に困っているのかのヒヤリング

◎困っていることの分解

◎プレゼンへ向けての方向性の確認

◎まとめの素案提示

僅かなサポートで、受講生たちはプレゼンを実施する上での自分たちが抱えている「困った問題」に柔軟に対応していたことは事実である。このサポートの根幹には、受講生への肯定的評価を行うという点があることを強調しておく。

Ⅳ 添削方法と自己肯定感の醸成

このトピックにおいて注目しておきたいことは、2022年度に阪南大高へ最初の「サキタン」

プログラムの提案を行った際の岸本尚子校長（本学提案当時は教頭職）の次の言葉である。

A大学から大学の授業提供と単位認定を提案されましたが、動画を見て授業内容を理解し課題提出を求められても高校生には難しいですね。阪南大学からの今回の提案においても対面での授業をご一考下さい。特に、実施にあたっても阪南大学のキャンパスで出来ないでしょうか。

岸本校長の示唆的な発言をPJ及び科目提供者である筆者としては前向きに受け止め、検討の結果、以下の項目を導き出した。

①実施は阪南大学のキャンパス

②課題は全て添削の上でフィードバック

③受講生の自己肯定感を引き出す添削の実施

④5日間終了後は受講生に達成と成長の提供

⑤脱落者0名の達成

改めて整理しても、阪南大高「サキタン」実施にあたっては、科目提供者としての筆者の教育力では実現できるか否か不明と言わざるを得ない、予測していた以上の高いレベルを求められることとなった。ただそれがPJとして導き出した結論であることをふまえ、実現に向けて準備を行うことをミッションとしたのである。

上記②及び③について記しておこう。先ず、「②課題は全て添削の上でフィードバック」であるが、これは、実施日の次日1限開始前に受講生各自の座席に返却している。9時開始の10分前に受講生は全員教室に到着し着座することが阪南大高のルールとなっていたため、それを有効に活用することとした。それによって、前日の確認を行うことが、受講生が作り出した授業開始前の風景となった。

2022年度は38名であったため、筆者が1日の3課題（38名×3コマの課題114枚）の添削を行った。2023年度は112名と約3倍の受講生と増えたことで、本学1年次全員履修科目「スタディスキルズ」を委託している「株式会社インギ」に1・2限の課題のみの添削依頼を行った⁵⁾。3限分は、従来通り筆者が行っている。

次に「③受講生の自己肯定感を引き出す添削

の実施」であるが、宇都宮・豊福両先生への依頼においても、以下の項目を実現する方向性で実施している。

◎誤字・脱字のチェック

◎受講生が作成した文面の積極的評価

◎対案文面は受講生が作成した原案を生かす
全課題を通してこの3点を共通理解とすることで、有り体な言い方をすれば「やれば出来る感」を受講生に提供することを目指とした。いわば、1日3コマ5日間という集中講義の環境は、即時的なフィードバックの実現が可能であり、その成果をはかれることも判明した。実際に、課題数が積み重なるにしたがって、受講生のレポート作成力は向上したと言える。

ここで、一点だけ特筆しておきたいのは、各課題に対して、タブレットやスマートフォンで調べることを許容したことである。プログラム開始後2日間程は、ネット情報をそのまま写す受講生も少なからずいた。言うまでもなくそれが間違った情報であることも多く、その点は添削において指摘すると共に、自分の表現で書くことを促すコメントを出すことでその実数は日を追うごとに減少していった。

レポートをはじめとして、高校生の「言語化力」を向上させるには、即時性が求められる。この即時性とは、作成した後に間を置かずフィードバックすることである。前述のように、レポート作成・ディスカッション・プレゼンテーションの3アクションを1パッケージとして90分間の後半のプログラムとした。この授業設計において、最も効果的であったのは、その場でアドバイスを実施し、課題の進捗を促したことである。

毎回の授業の最後に実施されたプレゼンテーションにおいても、毎回の授業時間に教室で受講生のサポートを行ったPJメンバー及び援軍からのコメントを提示してもらった。そのことによって、自己肯定感は高まる傾向となった。

本トピックの最後に2023年度実施の「サキタン」における象徴的な受講生の事例を挙げておきたい。第4日目3限の課題をふまえて、一人

の受講生はレポート提出後、スマートフォンで課題となった「免罪符」について検索し研究論文を読んでいた。その理由を尋ねてみると「面白いテーマだということが分かったから」というのが回答であった。「サキタン」での授業内容は、学びへのきっかけを提供するに過ぎない。そこから先に続けて探究していくのは、受講生自身である。

V まとめにかえて

第5日目の「サキタン」最終日は、宿題をふまえた以下の2課題である⁶⁾。

①本学専願入試「学修計画書」の作成

②本プログラムへの振り返りレポート200字の作成

①については、授業提供者としての責任もあり、筆者が2022年度・2023年度の両年度全員の添削を行っている。添削の際に、受講生が作成した原案を99%生かし、1%の加筆修正を行っている。要するに、センテンスの順番を入れ替えたり、接続詞を加筆したりすることで文面を整えたに過ぎない。

②については、ほとんどの受講生が10分足らずで完成させている。その多くが、200字での完成を行っている。中には、200字では足りないとの苦言を呈してくれた受講生が2年間にわたり複数いた。その中から、受講生2人のレポートを引用しておくこととする⁷⁾。

I (2022年度実施)

Keywords ①しんどい ②成長 ③達成感

このプログラムを一言で表現するならば、「しんどい」に尽きます。大学入学後に受講する授業を高校生時点で受けるのは難しくもありました。それと共に、自分自身の成長を感じられました。最初は150字が書けるとは思えませんでした。課題を重ねる毎に書けるようになりました。国語の作文も苦手に感じていた自分が200字も簡単に書けるようになったことに大きな成長を感じました。とにかく1日の授業が終わるた

注

- 1) 『阪南論集 人文・自然科学編』Vol.60 No.1 37-42 ページ。
- 2) 文部科学省「大学設置基準」https://www.mext.go.jp/b_menu/shing_i/chousa/koutou/053/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2012/10/30/1325943_02_3_1.pdf (採録日：2024年11月18日)

【大学設置基準】

(単位)

第21条 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成することを標準とし、第二十五条第一項に規定する授業の方法に依り、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、おおむね十五時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位として単位数を計算するものとする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもつて一単位とすることができる。

なお、授業の後半のワーキングでは、スクリーンに時計を提示し、残り時間を意識しながら個人・グループそれぞれのワークを実施している。これによって、課題達成へ向けての時間管理と制限時間の中で完成させる重要性を意識できるようになった。

- 3) 2024年度実施(実施時期：2025年03月を予定)では、過去2年間に行った200字のレポート作成に加え、満足度及び理解度を軸としたアンケートを実施する予定である。
- 4) PJメンバーと各部署からの援軍については、既

に公表しているためここでは割愛する(『阪南論集 人文・自然科学編』Vol.60 No.2掲載)。

- 5) 株式会社イングからは、宇都宮麻美・豊福千穂両先生に來校頂き、授業内容を見学した上で添削業務を担当してもらうこととなった。
- 6) 2023年度実施にあたっては、日程の関係から週末から2日間を空けて最終日第5日目の実施となった。それを受けて、「学修計画書」を作成していただくことを宿題とした。
- 7) 本「研究ノート(3)」に引用した、受講生のレポート引用については、2024年09月17日(火)段階で、岸本尚子校長と西垣貴史総合進学コース委員長より了承を得ている。なお、5日間(1日3課題)の全課題レポートは、2022年度・2023年度共に、PDFデータとして阪南大高に提出している。
- 8) 株式会社ユーザーローカルの無料ソフトを使用している(<https://textmining.userlocal.jp/>)。ワードクラウド「出現頻度順」と共起キーワードを提示しておく。

2022年度・2023年度の2年分のデータをふまえると、阪南大高から要請された「5) 自己肯定感と成長実感」については、概ね達成できたのではないかと、というのがPJ及び科目提供者である筆者の理解である。

PJでは、次年度以降も阪南大高から提示される新たなオーダーへの対応を実現するための検討を重ねていく予定である。

*本研究ノートは、高大連携プロジェクトチームメンバー(浅井・上園・河野・田中(広)・立田〔敬称略〕)各位と斎藤恵子教務課長、さらに、阪南大学高等学校岸本尚子校長、西垣貴史総合進学コース委員長による内容確認及び資料精査を経ていることを明記しておく。

